



2026年8月発行 | VOL.7

THE TOBISHIMA TIMES

編集・制作：島づくりディレクター 服部帰蝶

連絡先：とびしま総合センター TEL 95-2001



新緑が深まり、夏の訪れを感じる飛島から、『THE TOBISHIMA TIMES』vol.7をお届けします。この数か月は、定期船の故障や断水など島の暮らしに影響を及ぼす出来事がある一方で、新たな体験コンテンツの制作や情報発信など、地域の魅力を伝える取り組みも進めてきました。今号では、その一部をご紹介します。

【飛島・酒田】MERMAID EXPERIENCE がスタート！

定期船故障を受け、本土も含めた形で開催

7月より、マーメイド体験イベント「【飛島・酒田】MERMAID EXPERIENCE」を開始しました。

昨年度は飛島のみで開催しましたが、今年度は定期船「とびしま」の故障により運航が不安定な状況が続いていることから、7月上旬から8月中旬までは酒田市内、8月下旬から9月下旬までは飛島と、期間を分けて開催しています。

今回のイベントでは、人魚の尾ひれを着けて陸や浅瀬で撮影を楽しむプランや、実際に海を泳ぐ体験など、参加者の希望に合わせた内容としています。いずれも飛島や庄内の海の魅力をを知っていただき、「こんな海が山形にもあるんだ」と感じていただけるきっかけづくりを目指した体験型企画です。

昨年度は飛島で実証実験として開催し、多くの方にご参加いただきました。その経験を踏まえ、今年度は安全管理や運営方法を見直しながら、本格的な体験イベントとして実施しています。また、参加者一人ひとりの経験や希望に合わせて内容を調整し、安心して楽しんでいただけるよう努めています。

人魚体験は目的ではなく、飛島や庄内の海を知り、地域へ興味を持っていただくための「きっかけ」です。体験を通して地域の魅力に触れ、「また来てみたい」と思ってもらえるような企画へと育てていきたいと考えています。

また、今年度は酒田市内に加え、近隣自治体である遊佐町にもチラシ設置にご協力いただき、より多くの方に知っていただけるよう広報活動を行いました。多くの方々にご協力いただきましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。

今後も、安全を第一に、体験を通して飛島と庄内の海の魅力を発信するとともに、地域を訪れるきっかけづくりにつながる取り組みとして継続していきたいと考えています。

ラジオを通して飛島の魅力を発信

さまざまな番組で活動や飛島の魅力を紹介しました

6月から7月にかけて、FM山形「WAVE4 yamagata EXCEED」、NHK仙台「Nandary」、酒田ハーバーラジオへの出演の機会をいただきました。

FM山形とNHK仙台では、飛島で取り組んでいる活動や島の魅力についてお話しし、県内外へ飛島を知っていただく機会となりました。

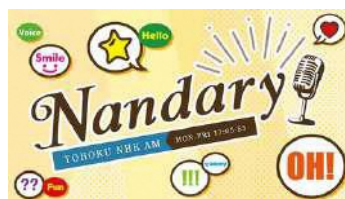
また、酒田ハーバーラジオでは、酒田市の官民共創プランナーのお二人と、日常的な会話も交えながら和やかな雰囲気の中で収録を行いました。普段の活動ではなかなかお伝えできない内容についてもお話することができ、大変有意義な時間となりました。

ラジオは映像がない分、言葉だけで情景や魅力を伝える必要があります。そのため、普段とは異なる視点で飛島について考え、自分自身の活動を改めて整理する機会にもなりました。

言葉だからこそ伝えられる飛島の魅力についても考えながら、今後もさまざまな形で情報発信を続けていきたいと思っています。



※画像は公式HPより引用
<https://rfm.co.jp/program/wave4-exceed>



※画像は公式HPより引用
<https://www.nhk.jp/p/nandary/rs/JMRY7X2YP2/>



※画像は公式HPより引用
<https://www.sakatafm.com/>

地域福祉ワークショップに参加

飛島の現状や地域の声を共有

7月、酒田市長主催のワークショップ「さかたの地域福祉 おしゃべり会」に参加しました。このワークショップは、酒田市地域福祉計画・地域福祉活動計画の策定に向け、市民や関係者が地域の課題や、これからの地域づくりについて意見交換を行う場として開催されたものです。

今回は地域福祉課よりお声がけをいただき、飛島地区の現状や、地域で感じていること、日頃の活動を通して見えてきた課題などについてお話ししました。

意見交換では、本当に困っている方ほど、自ら声を上げることが難しい場合があるため、そうした声をどのように把握していくかという点が話題となりました。一方で、積極的に発言される方の意見が、必ずしも地域全体の考えを表しているとは限りません。そのため、寄せられた意見をそのまま受け取るだけでなく、その背景や状況を丁寧に確認するとともに、日頃の関わりや個別の対話を通して、声になりにくい思いにも目を向けていくことが大切だと感じました。

今回のワークショップを通して、酒田市全体の地域福祉について考える貴重な機会となりました。今後も、さまざまな立場の声を丁寧に受け止めながら、活動に活かしていきたいと考えています。



酒田市地域おこし協力隊が集合

それぞれの強みを活かした地域づくりへ

7月、酒田市広報用の写真撮影のため、酒田市で活動する地域おこし協力隊が一堂に集まりました。

隊員それぞれ着任時期が異なることや、活動場所・担当業務も様々であることから、私にとっては全員と顔を合わせる初めての機会となりました。

地域おこし協力隊という制度名は共通していますが、担当するミッションや活動内容は一人ひとり異なります。それぞれがこれまでの経験や得意分野を活かしながら、さまざまな形で酒田市の地域づくりに取り組んでいることを改めて感じました。

今回の撮影を通して、酒田市内の異なる地域で活動する仲間の存在を身近に感じました。それぞれの活動から刺激を受けるとともに、私自身も飛島での活動に一層励んでいきたいと思いました。



飛島周遊型謎解き本「夕風の人魚と七つの謎」完成

飛島を歩きながら楽しめる、新たな体験コンテンツを制作

6月、飛島を巡りながら楽しめる周遊型謎解き本『夕風の人魚と七つの謎』が完成しました。

この謎解き本は、飛島を訪れた方に、景色を見るだけではなく、自ら歩き、考え、島をより深く知っていただくことを目的として企画した体験型コンテンツです。40ページを超える冊子について、構成・文章・写真・デザインまで、一冊を通して私自身が制作しました。

制作にあたっては、実際に島内を歩き、景色の見え方や移動時間、立ち寄り順番などを確認しながらルートを構成しました。また、島民の方々から飛島の歴史や暮らしについて伺ったお話をもとに、「記憶」を物語のテーマとしています。

飛島には、美しい自然や歴史ある場所が数多くありますが、それらをただ巡るだけでは印象に残りにくい場合もあります。そこで、各所で謎を解きながら景色を眺めたり、写真を撮ったり、その場所ならではの体験を楽しんだりすることで、単に目的地を巡るのではなく、飛島で過ごした時間そのものが思い出として残るよう工夫しました。

また、小学生からでも楽しめる内容となるよう、難易度や文章表現についても試行錯誤を重ねました。

完成後は、実際に島民の方々や一般の方にも体験していただき、多くのご意見をいただきました。今後はいただいたご意見をもとに内容を見直し、より楽しんでいただける形へ改善を重ねていきたいと考えています。

この謎解き本をきっかけに、「飛島をもう少し歩いてみよう」「この景色にはこんな意味があったんだ」と感じていただければ嬉しく思います。

現在は、とびしまマリンプラザで販売しています。飛島を訪れた際には、景色を眺めるだけでなく、ぜひ島を歩きながら、その土地ならではの歴史や自然、文化にも触れていただければ幸いです。

今後も、地域の魅力を「見る」だけではなく、「歩き、考え、体験する」ことで伝えられるコンテンツづくりに取り組んでいきたいと考えています。



東北公益文科大学で講義を行いました

飛島を題材に、地域での企画づくりについてのお話

6月、東北公益文科大学の呉尚浩教授の講義にお招きいただき、お話する機会をいただきました。

今回のテーマは、「飛島を舞台としたプロジェクトデザイン～地域に人を呼び込む・巻き込むプロジェクトのつくりかた～」です。

去年は「飛島に移住してからの実体験」を中心に、良いことも大変だったことも含めてお話ししましたが、今年は飛島での暮らしや文化などを紹介したうえで、私が取り組んでいるマーメイドスイム体験イベントや周遊型謎解きを例に、地域資源を活かした企画づくりの考え方やプロセスについてお話ししました。

講義では、「地域資源だけでは企画にはならず、自分自身の経験や強みと組み合わせることで、自分だからできる企画が生まれること」や、「何を作るかではなく、参加者にどのような体験を届けたいかを考えること」の大切さについてもお伝えしました。

私自身にとっても、日頃の活動や企画づくりを改めて整理する良い機会となりました。今後も、飛島での活動を通して得た経験を発信しながら、地域の魅力や企画づくりについて伝えていければと思います。



飛島の暮らしとこれからを伝える研修会

ミライニで語る1時間半

6月、酒田市交流ひろば「ミライニ」にて、飛島をテーマとした研修会で話しする機会をいただきました。

当日は、飛島の自然や歴史、文化に加え、実際に飛島で暮らしている立場から、島の日常や定期船が生活に与える影響、人口減少など飛島が抱える課題について、自身の経験も交えながらお話ししました。

また、課題だけではなく、マーメイドスイム体験イベントや周遊型謎解きなど、地域資源を活かした新たな取り組みについてもご紹介し、「それでも飛島に可能性を感じる理由」についてお伝えしました。

研修会後には多くの質問やご意見をいただき、参加者の皆さまと飛島について考える貴重な機会となりました。

この研修会の中で特に印象に残ったのは、冒頭で「飛島へ行ったことがある方」の挙手をお願いした際、参加者の約9割が飛島を訪れた経験があったことです。酒田市民でも飛島を訪れたことがない方が多いと聞いていたこともあり、この結果には大変驚きました。飛島に関心を持って研修会へ足を運んでくださる方が多いことを実感し、とても嬉しく感じました。

今後も、飛島の現状だけでなく、その魅力や可能性についても発信を続け、多くの方に飛島を知っていただけるよう取り組んでまいります。



「つぶやきBar」で飛島の活動を紹介

思いがけないご縁から広がった交流の時間

5月、酒田産業会館で毎月開催されている「つぶやきBar」に初めて参加しました。

「つぶやきBar」は、安川副市長が主催し、「酒田でやってみたいこと」や「こんな地域にしたい」といった思いを自由に語り合う交流の場です。

当日は参加者として伺いましたが、安川副市長から「ぜひ飛島での活動について皆さんに紹介してほしい」とお声がけいただき、急きょお話しする機会をいただきました。

準備していた発表ではありませんでしたが、パソコンに保存していた資料を使いながら、マーメイドスイム体験イベントや周遊型謎解きなど、飛島で取り組んでいる活動についてご紹介しました。

お話の後には、「応援しています」「一緒にできることがあれば協力したい」といった温かいお声をいただき、大変嬉しく感じました。飛島だけでなく、本土にも活動を応援して下さる方々がいることを改めて実感する機会となりました。

今後も、このようなご縁を大切にしながら、飛島と本土をつなぐ活動を続けていきたいと思っています。



春から夏にかけての環境整備

安全で暮らしやすい島を目指して

3月から6月にかけて、センター職員で道路補修や草刈りなどの環境整備を行いました。

春先には、冬の影響で傷んだ道路の穴を補修する作業を実施しました。本格的な舗装工事ではありませんが、補修材を用いて応急的に穴を埋め、安全に通行できるよう対応しました。補修材には限りがあるため、通行への影響が大きい箇所を優先しながら作業を進めました。場所によっては深い穴もあり、車両や歩行者が安心して通行できるよう、一つひとつ確認しながら作業を進めました。

また、5～6月には噴霧器を使用した除草剤の散布や、島民の方々と一緒に草刈りも行いました。草木は成長が早く、定期的な管理が欠かせません。こうした環境整備も、飛島で安心して暮らし、訪れた方に気持ちよく過ごしていただくための大切な仕事の一つです。

島では、市職員や消防職員がそれぞれの本来の業務だけでなく、状況に応じて協力しながら地域を支えています。私自身も、地域の皆さんと一緒に作業を行う中で、飛島ならではの暮らしを改めて感じる機会となりました。



離島医療の現場から感じること

高齢化が進む飛島で見えてきた課題

飛島では、必要に応じて急な体調不良への対応が行われていますが、5月は特にそのような場面が重なりました。

飛島には診療所がありますが、入院設備のある病院はないため、必要に応じてドクターヘリや海上保安庁のヘリコプターによる医療搬送が行われています。私自身も昨年から緊急時の対応に携わっていますが、5月は特に多く、離島医療を支える体制の重要性を改めて感じました。

また、人手が必要となる場面では、島民の方々にも車両通行止めなどのご協力をいただき、多くの方々の支えによって対応が行われています。

飛島では高齢化が進み、医療や介護への需要も高まっています。離島という地理的条件も重なる中、本土とは異なる環境で対応が行われていることを、現場で活動する中で改めて実感しました。

高齢化という言葉だけでは伝わりにくい現場の現実を目にする機会も増えています。こうした現状は飛島が抱える地域課題の一つであり、今後も考えていく必要があると感じています。また、現場で感じたことを大切にしながら、飛島の現状について発信していきたいと思います。



断水を通して感じた島の支え合い

困ったときに助け合える飛島のあたたかさ

4月、中村地区において断水が2回発生しました。いずれも当日中に復旧しましたが、1回目の断水時には、私と消防職員で飲料水を配布する対応を行いました。

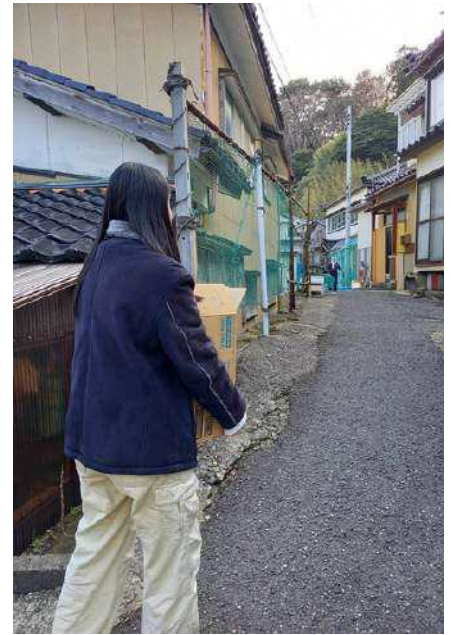
断水は日常生活に大きく影響する出来事ですが、対応を進める中で改めて感じたのは、飛島の人と人とのつながりでした。

断水中、別の集落に住む島民の方から「もし困っているなら、うちを使っていよいよ」と声をかけていただきました。

実は、飛島へ着任したばかりの昨年4月にも、ガス設備の不具合でお湯が使えなかった際、他の島民の方から「お風呂を使っていよいよ」と声をかけていただいたことがあります。結果的にはその日のうちに復旧したため、お世話になることはありませんでしたが、そのお気持ちがとても嬉しく、今でも印象に残っています。

島で暮らしていると、不便さを感じる場面もあります。しかし、それ以上に困ったときには自然と手を差し伸べてくださる方がおり、人と人との距離の近さを改めて実感しました。

この温かさも飛島の大切な魅力の一つとして、多くの方に伝えていきたいと思います。



定期船故障が続く中で

暮らしや観光への影響

3月26日に発生した定期船「とびしま」のエンジン故障は、本誌発行時点においてもなお影響が続いています。現在は代船による運航が行われていますが、定期船と同じ条件で運航できるわけではなく、島民の暮らしや観光、事業活動などにもさまざまな影響が生じています。

代船は船ごとに運航条件や定員が異なり、乗船人数が限られることから、事前予約が必要な状況となりました。当日に空席があれば乗船できますが、満席の場合は乗船できず、観光で訪れようとした方が来島を断念するケースもありました。

また、定期船より運航基準が厳しい船であることから、欠航への不安を理由に旅行を控える方も見られ、観光事業者への影響も続いています。

さらに、車両の輸送ができないなど、物流面にも影響が生じています。私自身の活動でも、マーメイドスイム体験イベントを実施するにあたり、活動計画の変更を余儀なくされる場面がありました。

年未年始には22日間の長期欠航を経験しましたが、今回の故障では、代船による運航が続いていても、移動や観光、事業活動などにさまざまな制約が生じることを実感しました。

現在も定期船の復旧に向けた対応や代船の運航維持など、多くの関係機関の皆さまにご尽力いただいています。この場をお借りして感謝申し上げますとともに、一日も早く定期船が復旧し、島民の皆さまや飛島を訪れる方々が安心して利用できる環境に戻ることを願っています。



↑ 定期船故障後、3月28日に運航された臨時の船。
予定どおり本土へ渡れなかった職員らを、島民や関係者が見送りました。



↑ 貨物船「第五平成」。通常の定期点検時にも貨物輸送を担っていますが、定期船故障後も引き続き飛島への貨物輸送を支えています。